

知覚動詞「見える」の推定構文への拡がり

——共時態における文法化——

志 波 彩 子

1. はじめに

本研究は、知覚動詞「見える」が構成する「～と見える」という推定構文¹について、これがどのように「見える」の他の意味・用法と関わりながら連続的な体系を成しているのかを明らかにすることを目的としている。「～と見える」はある事態を根拠として他の事態を推論するという「ラシイ」や「ヨウダ」に似た意味を表し、モダリティ形式としてかなり文法化している。よって、本研究の議論は、共時態における文法化の体系を記述することでもあると言える（三宅2006）。

知覚動詞「見える」は、英語であれば「see, look, seem」などのいくつかの別の動詞で表現される意味を、異なる構文によって表している。

- (1) 山の上から海が見える。【知覚構文】
- (2) 水が青く見える。【様子確認構文】
- (3) 今後も経済格差は拡大していくと見える。【推定構文】

本研究は、(3)のような「～と見える」という構造形式で表される推定構文の意味が、他の意味や構文とどのように関連しながら、全体として「見える」の意味の体系を形成しているのかを考察する。

2. 知覚動詞「見える」の概要

2.1 先行研究

知覚動詞「見える」が構成する構文全般についてや、多義の構造について考察した研究は管

¹ 本稿では「構文」のほかに「構文タイプ」という用語を用いることがあるが、タイプとは他の関係するタイプを想定した場合の、横の関係（パラダイグマティックな体系＝ネットワーク）における型の呼び方としてある。これに対し、「パターン」というのは縦の体系（シンタグマティックな（統合的）体系）における型のことである（これは Sapir 1921の術語の使用を参考にしている）。本研究における「構文」とは、繰り返される使用により慣習化した構造のパターンを指している（志波2022）。

見の限り見当たらない。一方で、他動詞「見る」については、いくつかの研究の蓄積がある。ここでは、主なものとして奥田（1967）と田中（1996）を概観し、本研究との関係を考える。

奥田（1967）は、「見る」の多義について、それぞれの意味の選定には構造的な条件を設けることが必要であることを主張している。例えば、基本義の視覚認識の意味は、「見る」が具体名詞とある種の現象名詞と組み合わせるときに現れる意味である。また、「N-ニ 対象ヲ 見る」という構造の中では、「発見する」という意味になり、対象が具体名詞であるという制約がなくなる。さらにこの構造の主体（経験者）が一般的な人である無人称文では、述語「見る」は「ある、あらわれる」という意味にずれるとする。また、対象が抽象名詞になれば「しらべる、観察する」という意味になり、「わるく、おもく、かるく、あまく（見る）」のような句と共に起すれば「評価する」という意味になり、引用のト節と組み合わせるときに「判断する」という意味になる。このように、どのような構造的条件のもとで当該の意味になるのかということ指定しなければ、語義の記述は主観的なものになってしまう。奥田（1967）のこうした意味記述の方法論は、本研究が記述のよりどころとするものである。

次に、田中（1996）は、「見る」の多義について、ある一定の意味論の原理によって説明を試み、どのように基本義から派生義が生まれるのか、そのメカニズムを考察している。例えば、視覚的認知として用いられた「見る」が繰り返される文脈内の推論によって「判断」の意味を派生させた、という説明をしている。田中の分析は、多義語の意味的連続性と派生のプロセスを考える上で参考になるが、本研究は多義語のそれぞれの意味には構造的な条件が深く関わっていると考える。「文脈」という曖昧なものではなく、当該の意味を支える形式（条件）は何か、という点を追求したい。

2.2 「見える」が構成する8つの構文と既存の動詞構文

本研究では「～と見える」という推定構文と、「見える」の他の意味とのつながりを見るために、「見える」が構成する構文を取り出して分類した。「見える」は既存の動詞構文タイプの要素となることで、自身の語彙的な意味と文の構造が持つ意味との相互作用により、独自の意味を発達させている。本研究では、「見える」が構成する構文タイプについて、名詞や他の成分（形容詞や節）の意味特徴（カテゴリーカルな意味²）と格体制の違いによって以下の8つの構

2 カテゴリーカルな意味とは、簡単に言えば、文法的な振る舞いに関わる、あるグループの語に共通の意味特徴のことである。早津（2015）では次のように定義されている。

・「個々の単語の語彙的な意味のなかで、その単語の文法的（形態論的・構文論的）な性質をうみだし支えている一般的な側面」（p. 14）

早津（2015）はカテゴリーカルな意味という概念を、「単語」の語彙的な意味の一側面を表す場合に限って用いている。しかし、本研究は、句や節が持つ共通の一般的な意味的側面も文の構造にとって非常に重要であると考え、これを「意味特徴」と呼んでいく（注8に書いた工藤（1982）の「依頼」という意味も、本研究の意味特徴に相当する）。

なお、ここで言う「意味特徴」とは単語や句を文から独立させて分類するようなシソーラス的な概念では

文を取り出した。すべての「見える」を要素とする文は、その意味の違いによって以下の8つの構文のいずれかに分類されると考える。各構文の典型的な構造形式と例文を示す。

- 1) 視覚認識 [(人N-ニ/ガ(ハ)) 具体/現象N-ガ 見える] 「海が見える」
- 2) 知的認識 (思考) [抽象N-ガ 見える] 「物事の本質が見える」
- 3) 存在確認 [N-ニ 情報N-ガ/節-ト 見える] 「新聞に彼の名が見える」
- 4) 様子確認 [具体N-ガ 形容詞-ク/ニ 見える] 「山が青く見える」
- 5) 判断 [N-ハ 抽象N-ニ/ト 見える] 「彼のやり方は理想的なケースに見える」
- 6) 比喩的判断 [具体N-ガ 具体N-ニ 見える] 「雲が羊に見える」
- 7) 推定 [節-ヨウニ/ト 見える] 「景気は回復しつつあるように見える」
- 8) 仮想 [節-カニ 見える] 「日本の景気は回復するかに見えた」

「見える」は自発・可能の意味を持つ接尾辞「ゆ」を持つ「見ゆ」を起源とするため、語彙的な意味に自発ないし可能の意味が含まれる。よって、「自発・可能性視覚認識」等とする方がより正確かもしれないが、名称が煩雑になるので、上のようにした。

さて、「見える」は対応する他動詞「見る」や他の心理・知覚・思考動詞が構成するタイプと一部構造形式を共有しながらも、独自のパターンも発達させている。ここで、上の8つのタイプが、他のどのような動詞構文と関係しているかを確認する。

まず1)の「視覚認識」は、下のa)の「知覚認識構文」に対応している。次に、2)から7)のタイプは、下のb)～f)のような、主に思考動詞が構成する他動詞構文に対応している。使用頻度の高い多義語の多くは、こうした既存の構文の要素となって新たな意味を獲得すると同時に、独自の意味を持った構文を発達させているのではないかと考えられる。さらに、g)の仮想構文は、自発系の意味を持つ動詞が独自に発達させた構文と考えられる(以下のa)～g)の構文については奥田(1968-72)を参照、各構文の代表的な動詞と例文を挙げる)。

- a) 知覚認識 [人N-ガ 具体/現象N-を 知覚動詞] 「夏男が海を見る」: 1)に対応
見る、眺める、臨む、睨む、見つめる、聞く、嗅ぐ、味わう等
- b) 知的認識 [人N-ガ 抽象N-ヲ 思考動詞] 「秋男は将来を考えた」: 2)に対応
思う、考える、考察する、検討する、分析する、考慮する、反省する、理解する等
- c) 発見 [人N-ガ N-ニ N-ヲ 発見動詞/知覚動詞]: 3)に対応

ない。例えば、「大学」という語は、「大学でご飯を食べる」であれば「場所」という文法的な意味を表すために《空間》という意味的側面が引き出され、「大学から連絡があった」であれば「田中さん」等と同じような「起点としての動作主」という文法的意味を表すために《組織》という側面が引き出され、「大学が燃える」であれば「紙、薪」等と同様に《具体物》という側面が問題になっている。つまり、本研究の言う「意味特徴」とは、語や句や節が文の要素となったときに、他の要素との関係性の中で引き出されてくる意味のうち、文法的な振る舞いに関わる意味のことである。本稿ではこの意味特徴を太字にして《 》で示していく。

構造の要素としてのカテゴリカルな意味については、志波(2022)でも触れた。

発見する、見つける、見る、認める等 「私は彼らの言動に共通点を見た」

d) 感情評価の態度 [人N-ガ N-ヲ 感情評価形容詞 思ウ/感ジル]: 4) に対応

思う、感じる、(軽く) 見る 「私は彼の態度を可愛く思った」

e) 判断 [人N-ガ N-ヲ N-ト/ニ/ノヨウニ 判断動詞/思考動詞]: 5)、6) に対応

「私は結婚を確かなものと思った」「夏夫を家族のように思う」

見なす、判断する等の判断動詞と上の b) の思考動詞

f) 思考内容 [人N-ガ [節]-ト/ヨウニ 思考動詞]: 7)、6) に対応

「春夫は来ないと思う」「私は彼がまた戻ってくるように思った」

g) 仮想 [(人N-ニハ) [節]-カニ 自発系認識動詞]: 8) に対応

思われる、思える、感じられる 「市場は安定するかに思われた」

このうち、いくつかの構文については、上の構文タイプを基盤としながらも「見える」が独自の構文を確立している。例えば、c) の「発見」に対応する「存在確認」では、認識者が「人N-ニ」という形で現れることはなく、「発見」ではなく「存在」の意味を持っている。また、d) の感情評価的態度では感情形容詞のみが要素となるのに対し、これに対応する4) の「様子確認」は「青く、大きく」などの属性形容詞も要素となり、「様子」という独自の意味を持っている。さらに、広く思考内容を表す「思考内容」には「推定」が対応するが、これも「見える」に含まれる「視覚情報を得る」という意味から、「推定」(視覚情報を根拠とした推論=証拠性判断)の意味を発達させている。

このように、「見える」が要素となる構文は、既存の動詞構文を基盤にしなが、意味・構造形式的にもっとも単純な「知覚」から、意味・構造形式的に非常に複雑な「推定」や「仮想」までを拡張させている。このような拡がりを見せる「見える」の各構文タイプはどのように連続し、それぞれの構文の意味や構造形式はどのように関係し合っているのか。以下では、知覚動詞「見える」が構成する構文の形式的特徴と意味及び各構文のサブタイプを詳しく考察し、典型的な構造形式を明らかにする。各構文の典型(中心)を明確にすることは、周辺例を位置づけ、構文の連続性を描く上で極めて重要である。

3. 「見える」が構成する構文の拡がり

知覚動詞「見える」は、「～と見える」のような「推定」というモダリティ的な意味を持つ構文を発達させている。この「～と見える」の認識主体はほぼ常に話し手であり、「彼は成功すると見えますか?」のような疑問文も通常は用いられないことから、モダリティ形式としてかなり文法化していると考えられる。ではこの推定構文は、「見える」が構成する他の構文と、どのように関係しながら動詞「見える」の多義の体系を形成しているのか。以下、推定構文との関係を念頭に置きながら、「見える」の構文タイプを記述していく。

3.1 視覚認識構文 (Visual Perception Construction)

意味・構造形式的にもっとも単純な視覚認識構文は、「見える」の基本義である「視覚の認識領域に対象が入る」という意味を、具体名詞 (《具体物》) ないし現象名詞 (《現象》) の対象と組み合わさる構造によって実現する。

	形式：	<small>認識主体</small> [(人N-ニ/ガ(ハ) <small>大主語</small>) 具体N/現象N-ガ <small>小主語</small> <small>視覚認識実現</small> 見える]
		意味：対象が視覚的な認識領域に入る

視覚認識の下位タイプとしては、(4) のように認識主体の視覚能力を表わすタイプがある。認識主体の視覚能力を表わすのはこの視覚認識構文のみで、「目が見える」などの慣用表現の頻度も高い³。用例を見ると、(5) のような場所可能 (山岡2003) や、(6) のような存在文の構造を持つ例、(6)(7) のように認識主体の視線の移動の結果、視覚認識が実現することを述べるパターン、(8) のように視覚認識が実現する／しない原因を伴うパターンが目につく。こうした場所句や条件句はすべて、視覚認識を可能にする／しない要因であると言える。さらに、「V-シテイルのが 見える」というパターンもある。

- (4) 太郎には黒板の字が見えない。⁴
- (5) 丘の上から教会の塔が見える。
- (6) 見当をつけて下ると、ガスの切れ間に亀井さんのザックが見え、ホット安心して近づくように急ぐ。(田中昌二郎『より高く、より遠く、未知を求めて』)
- (7) {急な坂を上ると／振り向くと} 富士山が見えた。
- (8) 窓が曇って、{顔／外の景色／明かり／星} がよく見えなかった。
- (9) ふと見ると、人々が広場に集まっているのが見えた。

「見える」などの自発・可能の意味を持つ構文が上で述べたような要因を表す句や節と共に起しやすなのは、当該事態の実現を動作主がすべてコントロールしているわけではないことと関係があると考えられる。通常他動詞構文は、当該の動作の実現を主語である動作主が自らの意志で完全にコントロールしていることを表している。これに対し、自発・可能の構文では、動作主(ここでは認識主体)は事態の実現を完全にはコントロールできておらず、その実現が何らかの内的もしくは外的な要因に左右されていることから、要因を表す句や節が現れるのだと

³ なお、本研究では慣用的な組み合わせや言い回しなどをすべて記述する余裕がない。自由な組み合わせを実現する構文タイプを中心に、推定構文との関係を記述していく。

⁴ 以下、用例には「見える」に下線、「見える」という事態の実現の要因に点下線を引く。なお、例文末に作品名のある事例はすべて国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』からの用例である。作品名がないものは、著者による作例である。

考えられる。

なお、「来る」の尊敬の意味で使われる「見える」も、この視覚認識の周辺に位置づけられると考える。

3.2 知的認識構文 (Mental Cognition Construction)

知的認識は、認識対象である名詞が抽象名詞（《抽象物》）である点で視覚認識と構造形式的に異なる。「見える」はこの知的認識構文を構成する場合は、思考動詞相当の意味を持たされている。

{	形式：	[(人	N-ニ	ガ	ハ)	大主語)	抽象	N-ガ	小主語)	見える]	「策が見えない」
	意味：	対象が知的な認識領域に入る、分かる													

対象に立つ抽象名詞の抽象性には様々なレベルがあり、次のようなサブタイプが見られる。

1) 《未来の地点》を表わすタイプの名詞

(10) {先/将来/限界/終わり/結果/可能性/方向/兆し} が見えてきた。

2) 《部分に対する全体》、《概略に対する細部》を表わす名詞

(11) {全体/仕組み/話の展開/状況/過程/道筋/関係/詳細/手口} が見えない。

3) 《物事の内部にある本質・本性》を表わす名詞

(12) 政策の {真相/真実/意味/理由/違い/良さ/矛盾/コツ/問題} が見えにくい。

4) 《他人の内面 (心理、性質)》を表わす名詞句

(13) 太郎の {意図/精神/策略/考え/気持ち/良さ/性格} が見えてくる。

ここでも、やはり知的認識実現のための要因を伴うことが多い (以下点下線は要因)。

(14) 実際に木やコンクリートなど素材の特性を知らなくとも、図面そのものは完成する。
むしろ、細かい素材の特性にこだわると、全体は見えなくなる。(松山 巖『手の孤独、手の力』)

(15) 最初は作り笑いにしかならないでしょうが、何度かやってるうちにその子のよさ、可愛さが見えてくるから不思議です。(切明 悟『探検・子どもの勉強の世界』)

以上の名詞タイプはいずれも、「見えやすいこと」に対する《見えにくいこと》を表わしている。第1のグループは、「現在」に対する「未来」、第2グループは「部分」に対する「全体」やその逆、第3と第4のグループは「外面」に対する「本質・内面」であり、いずれも

相対的に見えにくい事柄である。このように、知的認識構文が《見えにくいこと》を対象にするということは、視覚で捉えた事態を根拠に自分が確認できていないことを推論するという「推定」の意味への萌芽と捉えられるだろう。

知的認識タイプは述語が否定形であることが多く、肯定形の場合は「見え-テクル」の形をとることが多いのだが、これは上で述べた《見えにくい事柄》という意味特徴を持つ名詞の性質と関連しているのだろう。表1に大まかな数を示しておく。このデータは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』の2000年と2001年の「書籍・出版」ジャンルのコア、非コアを対象としたものである。知的認識タイプの否定形の割合は知覚認識と同程度に高く、さらに-テクル形の割合が高いことが分かる。

表1 「見える」が構成する構文タイプの割合と否定形、-テクル形の割合 (数値は目安)

	知覚	知的	存在	様子	比喩	判断	推定	仮想	合計
全用例数	958	133	64	338	122	92	221	32	1960
全用例数/合計	47%	7%	3%	17%	6%	5%	11%	2%	100%
否定	340	47	6	31	12	11	16	0	466
否定/全用例数	37%	35%	9%	9%	10%	12%	7%	0%	24%
-テクル	50	42	1	2	3	1	1	0	100
-テクル/全用例数	5%	32%	2%	1%	2%	1%	0%	0%	5%

最後に、数はそれほど多くはないが、間接疑問節と「V-することが」という補節を取るものもある。上の第2から第4のグループのタイプで、「見える」を「分かる」に置き換えられることから、こうした複文構造を取るようになったものと考えられる。

- (16) これを全体に当てはめれば、どうすれば良いかが見えてくる。
- (17) この音楽演出により、タイトル音楽はただ単に八つ墓村の存在を伝える性格のみに成るのではなく、根幹にはいいよりのないノスタルジアが込められていることが見えてくる。(小林淳『日本映画音楽の巨星たち』)

3.3 存在確認構文 (Existence Confirming Construction)

存在確認タイプは、認識対象の存在場所を表わすニ格を持つタイプである。このタイプを構成する「見える」は「存在する」という意味を持つことになる。存在確認タイプは、先に挙げた動詞構文の「発見」の意味を持つ構文に対応するが、この発見の構造 ([Nニ Nガ 発見/知覚動詞]) で用いられると、対象が具体名詞 (《具体物》) であれば視覚による発見、抽象名詞 (《抽象物》) であれば知的認識による発見の意味を帯びる (奥田1968-72 [1983: 107])。この発見の意味を持つ他動詞構文が、「見える」という自発・可能の動詞になると、存在の確認

という意味になる。特に、認識主体が一般化されていると、存在の意味が明確になるだろう。

形式：^{存在場所} [N-ニ^{認識対象}補語 N-ガ^{主語} / ト^{補節} ^{存在/出現確認}見える]
 意味：ある事物に対象が存在する

先に視覚認識で挙げた、存在構文の構造を持ちつつも対象が具体名詞である(6)のような例は視覚認識構文に含めていいと考える。つまり、視覚認識であるが、存在のニュアンスを併せ持っているということである。一方で、対象が抽象名詞である次のような例は、二格を持たない知的認識構文としては成立しにくいのではないかと思われる⁵。

- (18) 「落伍者」視には、差別の理由を部落の貧困に求める発想、近代的差別観がみえる。
 (藤沢靖介『部落の歴史像』)

上のような抽象名詞以外では、《兆し、兆候》などを表わす名詞(気配、かげり、ムード、傾向、変化、動き等)と、《他人の内面の生理や心理》を表わす名詞(疲れ、焦り、動揺の色等)が対象ガ格に立つタイプがある。こうした名詞タイプは、知的認識構文に現れる名詞タイプと重なっている。このとき、この構文は出現の意味も帯びる。

- (19) 経済に回復の兆しが見える。 cf. 現れる
 (20) もちろんこれまで長期の外国人研修員を受け入れたことはなかったが、改革開放の風はここにも吹いてきて、その立場に変化が見えはじめ、……(大野修作『文物鑑定家が語る中国書画の世界』)
 (21) 南波には色濃い疲れが見えていて、夜明け以降何も食べてはいなかった。(原健『処女航海』)

最後に、すでに古めかしい表現になっているが、[書物N-ニ 情報-ガ/ト 見える]という構造形式で情報の存在を表わすタイプがある。「見える」の存在確認構文では、このタイプが一番多い。

- (22) この役優婆塞すなわち小角の伊豆遠流の話は、『日本靈異紀』『三宝絵詞』『今昔物語集』『扶桑略記』などにも見える。(小松崎文夫『神話の旅人』)

⁵ ただし、抽象名詞が対象に立つ例は、「見られる」による存在確認タイプ(志波2013)に比べて非常に数が少ない。次第に「見られる」に取って代わられているのかもしれない。

3.4 様子確認構文 (Appearance Confirming Construction)

様子確認構文は、対象がある様子を伴って視覚されることを表す。様子確認構文の対象になる名詞は典型的に《具体物》である⁶。よって、様子確認構文は視覚認識の延長にあるタイプと考えられる。対象の様子は、典型的には形容詞(《状態》)で表される。この形容詞で表される様子は、対象Aの属性Bとして捉えられているものだが、「水が青い」と言い切る構文と異なり、「水が青く見える」は、対象の本来の属性は不問にして、見た目では当該の属性=様子であるという印象を描写する⁷。後で見る推定タイプとの違いを考えると、認識者が対象の本来の属性を承知しているか否かは様子確認タイプにとっては問題にならない。

ここでは、形容詞句が要素となるものを様子確認1、状態を表わす動詞のテ形が要素となるものを様子確認2として記述する⁸。いずれの様子確認タイプにも、視覚認識から推定や仮想タイプへの連続的段階を考慮に入れ、「外面的様子」と「評価性様子」という下位タイプを設けた。

3.4.1 様子確認1

様子確認の下位タイプである外面的様子を表わすタイプは、様子を表す句に、形や色などの外見で捉えられる形状を表わす形容詞(形状色彩形容詞)が典型的に用いられる。

	形式：	認識主体	(人N-ニ/ガ(ハ)大主語)	認識対象	具体N-ガ小主語	様子=対象の属性	形容詞-ク/ニ	視覚認識実現	見える
		意味：見た目では対象は当該の様子=属性だ							

6 様子確認構文は、2.2で述べた「感情評価の態度構文(彼女の態度を疎ましく思った)」に対応するタイプなので、本来は、具体名詞も人名詞も抽象名詞も対象に立つのだろうが(奥田1968-72)、調査したデータにおいては具体名詞(モノと人)が対象に立つ例がほとんどで、抽象名詞が対象に立つ例は、様子確認構文338例中次の1例のみであった。これは、「見える」の語義に影響され、「感情評価」ではなく「様子」を視覚的に捉える構文として成立していることを意味する。

・江木は肥つた、受け口の女で、その顔が喜ぶと、この世界の喜びがみんな不潔に見える。(三島由紀夫全集)

7 こうした意味は、構造上この形容詞句が述語動詞を修飾する句ではなく、不完全な節(defective clause、竹沢2015)であることに支えられていると考えられるが、本研究では文構造の階層性の問題に立ち入る余裕がないので今後の課題としたい。

8 工藤(1982)では、形態論レベルの形式と構文論レベルの形式を区別し、形態論レベルで様々な形式で現れるものを、構文論レベルでは同じ意味機能(意味特徴)を持ったグループとしてまとめあげ、1つの構文論的形式として扱うことの必要性が提唱されている。例えば、「どうぞ」が呼応する形式は、「してください、していただきませんか、していただきたい、するようお願いします」など形態論的には様々な形式であるが、これは構文論的にはすべて「依頼」の形式であるとする(ただし、それぞれが「依頼」の意味を持つためには、いくつかの構文論的条件が必要なこともある)。つまり、叙法副詞が呼応するのは形態論レベルの具体的現象としての形式ではなく、「依頼表現」という構文論的形式なのである。様子確認構文でも、様子を表す句は形容詞や動詞のテ形など、異なる形態論的形式が用いられるが、しかしこれらには共通に《状態・性質》をいう意味的側面(意味特徴)があり、構文論的なレベルでは、「状態・性質表現」として同じものとして扱っていいと考える。

- (23) {大きく／白く／長く／高く／狭く／灰色に} 見える。
- (24) 育江は不自由な身体で椅子を立ち、松葉杖にすがりつき、廊下づたいに部屋の襖を開けた。暗い室内にベッドが白く見え、育江はベッドにたおれこみ、声を殺して泣いた。
(石垣用喜『石垣島失踪事件』)
- (25) 小ぢんまりとした家の玄関に立つと、ことさらに大柄に見える。(深田祐介『革命商人』)

このほか、数は多くないが、「～の様子／形／姿／色に見える」のような、《外面の形状・色》を表わす名詞句が要素になる場合も、外面的様子を表わすだろう。

2つ目の評価性様子確認では、《評価・感情》を表す形容詞が要素となる。対象の見た目から導き出された認識者の対象へのプラスやマイナスの価値づけや喜怒哀楽といった感情を表わす形容詞が「様子」を表わす。外面的様子を表わすタイプが単に対象の外面の見え方を描写するタイプであるのに対し、評価性様子では、外面の印象をもとに認識者がある評価や推察を加えて対象を捉えたことが述べられる。この評価・感情を表わす様子＝属性が外見からは判断できない状態・性質であるとき、「嬉しそうに」のように「ソウ」の共起が必要になる ((28))。

- (26) 夏子は {かわいく／弱弱しく／大人しく／美人に／スリムに／神経質に} 見えた。
- (27) 提灯の光を受けた仲麿の横顔が、いつにもまして美しく見える。(藤巻一保『陰陽魔界伝』)
- (28) その時計は高そうに見える。 cf. あの建物は高く見える。

3.4.2 様子確認2

形式：[(人N-ニ／ガ(ハ)^{認識主体} 大主語) 具体N-ガ^{認識対象} 小主語 様子=対象の属性 視覚認識実現] 状態性動詞-テ 見える
 意味：見た目では対象は当該の様子＝属性だ

様子確認2は、形容詞ではなく、《状態性》を表す動詞のテ形を要素としている点のみ様子確認1と異なる。こうした動詞のテ形は表面上の形は形容詞ではないが、意味特徴としては形容詞と共通点がある。すなわち、先行する動作や変化を含意せずに視覚認識時における対象の様子をきわめて状态的、時に《性質》として表している。例えば、「行間が詰まって見える」における「詰まって」は、先行する変化を含意せず、対象の「詰まっている」という性質（工藤1995の「単なる状態」）を表わしている。このため、「[?]子供が遊んで見える」等、《動作性》の動詞のテ形は様子確認タイプを構成しない。

様子確認2にも、外面的様子と評価性様子の2つの下位タイプを設けた。外面的様子を表

わすものは主に《対象の物理的变化・状態》を表わす自動詞が要素となる。

(29) {輝いて／かすんで／飛び出て／ゆがんで／痩せて／ゆらめいて} 見える。

(30) 機体は鳥の嘴のように尖って見える。(徳永名知子『記憶の一ページめ』)

評価性様子を表わすタイプには、《心理・生理的状态》を表わす動詞や時間を越えた《性質》を表わす動詞が要素となる。ただし、上の外面的様子を表わすタイプに比べ、それほど使用頻度は高くない。

(31) 太郎が {疲れて／がっかりして／憔悴して／いつもと違って／大人びて} 見える。

(32) たっぷりとした羽根枕に上体を預けて眠る黒髪の青年は、よく整った顔立ちを持っている。しかし、頬は青白く、熱で憔悴しているためか、ひどくやつれて見えた。(かわい有美子『水に映った月』)

3.5 判断構文 (Judgement Construction)

様子確認タイプが本来の属性は不問にして、単に外見・見た目の印象としての対象の様子を描写するのに対し、判断構文とは、本当のところは不確かだが、見た目からは対象は当該の事物であるという判断を述べる。判断構文の典型的な構造形式は、認識対象及び判断内容を表わすニ格やト格の名詞が抽象名詞（《抽象物》）である場合である。

形式：[^{認識主体}(人N-ニ／ガ(ハ)大主語) (^{表現の仕方を限定}副詞句) ^{認識対象}N-ハ小主語⁹ ^{判断内容}抽象N-ニ／ト補語 ^{判断表現}見える]

意味：本当の所は不確かだが、見た目から対象が当該の事柄と判断される

抽象名詞が対象であるときの判断のタイプは、反復される、もしくは複数の具体的事例をひとくりに抽象的概念で一般化するパターンが多い。ここに、推論の過程はない。例えば、(34)であれば、「排泄が屋外」ということや「飲み水は濁った井戸の水だ」という具体的事例を「不衛生な環境」という抽象的概念で一般化している。

(33) 彼らのやり方は {理想的なケース／不条理／非常識／時代錯誤／逆説} に見える。

(34) 排泄は屋外で、飲み水は濁った井戸の水だった。非常に不衛生な環境に見えた。

⁹ 本研究では[人主語 非情物対象-ガV]という構造における非情物対象を小主語と見なしているが、このタイプのように、判断文であるがゆえに非情物対象が主題として現れ、かつ認識主体としての人々がほとんど現れない(表面化しない)ようなタイプにおける非情物対象を「小主語」と見なすかどうかは未だ議論の余地があるだろう。

- (35) ドライブ中の音楽ニーズは非常に高いので「聞きたいときにダウンロードする」というこの方法は一見合理的なやり方に見えるが、高層ビルなど障害物の多い日本の都市圏では接続品質が保てず、まだまだ実験段階というのが実情のようだ。(中川 竜ほか『トヨタとGAZOO』)
- (36) 江棋の姿は二十歳前後に見えた。しなやかな髪には幾つかの飾りが差し込まれ、その指には無数の指輪が光っている。(ろくごまるに『名誉を越えた闘い』)

判断構文には、「一見／私には／ある側面からは／初めのうち」などの認識の実現の仕方を限定する句を伴って、その限定された実現の仕方において当該の判断が可能であることを述べるものが多い。これは、先に3.1の視覚認識構文で触れた「可能の要因」を表わす句・節とともに、可能構文の一般的な特徴であろう¹⁰。要因と限定句の両方が表れる場合もある ((38)、二重下線は実現の仕方を限定する句、点下線は要因)。

- (37) 当時学生だった俺にはポルポトは確かに真理の実践者の一人に見えた。(大野田徹郎『わがままたなアジア』)
- (38) 質屋は質流れ品を回転させなければ現金にならないので、店ののきに流れた着物などがつり下げてあり、一見したところ洋品屋に見えたかもしれません。(高橋三恵子『フラッシュバック』)
- (39) ……実は、子どもの記した×の答え、教師の目からは未整理と見える記述こそがむしろ重要なのであって、……(尾木和英『評価で変わる国語の授業』)

(38)のように、認識対象と判断内容が《具体物》であるものもこの判断構文に含めたが、具体名詞の場合は視覚認識の含意があり、様子確認構文の意味との差が曖昧になる。基本的に、「Nが Aニ見える」のAが形容詞であるか、名詞であるかが様子確認と判断を分けるのだが、名詞の実体面ではなく属性面(どんなモノ)が問題になるとき(ここでは「洋品の店」であること)は、「A-ニ」が名詞であっても判断ではなく様子確認になるだろう。次の例は、認識対象は視覚で捉えられる《具体物》であるが、判断内容は《人の役割・属性》を表す名詞で、様子確認構文と判断構文の中間に位置する。

- (40) 全体にほっそりとした体つきで、どこか優雅な雰囲気がある。漁船の乗組員にはとても見えなかった。(大沢在昌『涙はふくな、凍るまで』)

¹⁰ 例えば、「この本は難しくて子供には読めない」の場合、「難しくて」という対象の特徴が不可能の要因、「子供には」が実現の仕方を限定する句である。「僕は恥ずかしくて彼女の眼を見て話せない」であれば、「恥ずかしくて」という動作主の心情が不可能の要因、「彼女の眼を見て」が実現の仕方を限定する句である。

一方、次の例は、判断の根拠を示し、それに基づいた推論の結果、当該の判断が下されることを前面に出して述べており、推定（証拠性判断）と言ってもいいだろう。上の例との違いは、判断内容の名詞句が動作性名詞であり、単なる抽象名詞ではなく《出来事》を表わしている点である。つまり、ある出来事（事態）を見て別の出来事（事態）を導き出しており、推論の過程が読み取られるのだろう。以下、判断の根拠に波下線を引くが、これは「可能」の観点から見れば「(可能／不可能) 要因」と捉えてきたものに一致する。

- (41) ひとあし遅れて偵察員の遠藤秋章飛曹長が乗り込もうとし、宇垣と何やら言い合っている。席の取り合いのように見えた。 (学研編集部『連合艦隊の最期』)
- (42) 首に締めたネクタイのうしろにビニールの紐がつけられ、そのビニール紐は屋根裏部屋の柱にしっかりと結びつけられていた。 「なるほど、首吊り自殺に見えますが、それだったらロープを首にかけるでしょうね？」 (山村美紗『京都茶道家元殺人事件』)

次の例は《人の役割・属性》を表す名詞が判断内容となっているが、「Nと見え(て)～」という構造形式で後続節に判断（推論）の根拠を伴っており、かなり推定タイプに近い。

- (43) 私を部屋に案内してくれた四十がらみのオッサンがこのペンションの主人と見え、紙に鉛筆で、片言の英語を交えながら、終始うつむき加減に、宿泊上の決まり事項をぼそぼそと私に伝え、階下に下りて行った。 (高塚俊男『定年バンザイ！熟年男のヨーロッパ (中欧) 一人旅』)

以上、判断構文は認識対象と判断内容が抽象名詞である場合に最も典型的であり、認識対象が《具体物》になると視覚認識の意味が含まれ、意味的に様子確認タイプとの違いが曖昧になることを述べた。また、判断内容が《出来事》である場合や「N-と見えて 根拠」という構造形式をとる場合は、ある出事態から別の事態を導き出す「根拠にもとづく推論」という意味が読み込まれ、後に見る推定構文に近づく。

3.6 比喩的判断構文 (Metaphorical Judgement Construction)

比喩的判断構文は、現実世界の認識対象とそれとは本来別物である他の物体や状況との間に類似性を見出し、想像世界で両者を対応付けて捉えることを表す。つまり、対応付けられる2項は意味的に別カテゴリーのものである点が重要である (森山1995)。認識者はこの2項が確かに別物であると承知している点で判断構文と異なる。また、比喩的判断構文における2つの名詞句は具体名詞 (《具体物》) もしくは現象名詞 (《現象》) である。

形式：〔(人N-ニ／ガ(ハ)^{認識主体} 大主語) 具体N-ガ^{認識対象} 小主語 具体N-(ノ)ヨウニ^{比ゆの対応物} 補部 見える^{視覚認識実現}〕
 〔具体Nガ Vシテイル-(カノ)ヨウニ 見える〕
 意味：本当は別物だが、見た目がその別物のような属性・事態である

(44) 立っている人が(まるで)石像に見える。

(45) 岩がにらめっこしている(かの)ように見える。

(46) 【前略】古文書を解説しているうちに、少しは古文漢文に馴染んでくれるかもしれないという叔父心もあった。「馴染めるわけないだろ！俺には、最後までミミズの盆踊りにしか見えなかった！」(前田 栄『その気もないのにお宝探し』)

(46)では「古文書の文字」を「ミミズの盆踊り」と対応させている。この両者はまったく別カテゴリーの名詞であると同時に、「盆踊り」の主体に「ミミズ」という本来の選択制限からは外れた名詞を組み合わせることで比ゆの解釈を生んでいる。

以上、比ゆ的判断構文では、比べられる2項は具体名詞(《具体物》)もしくは現象名詞(《現象》)で、認識者がこの2項を別物であると承知している点で判断構文と異なることを見た。

3.7 推定構文 (Evidential Judgement Construction)

「推定」とは、認識主体が捉えた何らかの感覚、印象、体験といった、自ら取得した情報を根拠に、不確かな事態を推論することで、三宅(1995)では「証拠性判断」とされている。推定構文は、基本的に「節-ト/ヨウニ 見える」という構造形式を持つが、節の構造(意味特徴と形式)がどのようなものであるかによって、「推定」のあり方には、推論の過程がほとんどない捕捉印象(仁田2000)から、ある事態から別の事態を推論するものまで段階がある。

この「見える」による推定構文は、認識主体がほぼ常に話し手であり、特に「～と見える」の場合は「見えた」という過去形で述べられることがほとんどないことから、モダリティ形式として文法化していると考えられる。以下、主に捕捉印象と内実推定(岡部2011、後述)を表す「～ように見える」を推定1、原因推定を主に表す「～と見える」を推定2として記述する。

3.7.1 推定1 (捕捉印象：ヨウニ見エル)

「ヨウニ見エル」は「ト見エル」に比べ、ヨウニで受ける従属節のカテゴリカルな意味が《状態》(特にシテイル形)である場合が多いという構造的特徴を持つ¹¹。

¹¹ 参考程度の目安の数値だが、ざっと分類した「ヨウニ見エル」180例中169例(94%)がシテイルや否定形、形容詞等の状態性述語である。

- 形式：〔(人^{認識主体}N-ニ/ガ(ハ)^{大主語}) 状態性述語節-ヨウニ^{判断内容} 見える^{判断実現}〕
 意味：本当の所は不確かだが、見た目の印象や情報から当該の判断(命題)が推論される。

まず、(47)は動作動詞(の進行形)で、見たままの外見的印象をそのまま述べているため、推論の過程はほとんど読み取れない(仁田2000の捕捉印象)。(48)と(49)は、生理・心理的状态述語で外見の印象をもとに知覚対象の内面(生理と心理)を捉えており、(31)の評価性様子確認構文に非常に近い意味を表している。これも、一つの実体の内面と外面であり、時間的な隔たりはなく1つの事態であると言える。

- (47) 太郎は {横たわっている/何かを食べている} ように見える。
 (48) 太郎は {疲れている/風邪が治っている} ように見えた。
 (49) 美子は {迷っている/がっかりした/分かっている/固執している} ように見える。

また、次のような例では複数の具体的な事例を根拠に、それらの事例をひとくくり一般化する判断が下されている。ここにも、推論の過程は読み取りにくい。

- (50) 生物をマクロでながめてみると、あまりにも多種多様である。それらは、形とか生態の違いだけが目立って、共通性がないように見える。しかし、ミクロの視点から見れば、……(佐藤稔、佐藤秀夫『いのちと塩』)

一方次の例では、用例(34)と比べると分かるように、複数の具体的事例を根拠に推論された結果、別の一般的事実(事態)が導き出されている(複数の事例→不衛生な環境【ひとくくりの一般化】→人間の生活が保障されていない【一般的事実】)。

- (51) 集落は見るからに貧しく、荒れ放題で、子供たちは汚れていた。習俗のちがひ、と考えることのできぬ水準の話である。人間としての最低限の暮らしすら、アイヌには保証されていないように見えた。(佐々木譲『武揚伝』)

ただし、この例も時間的な隔りがある事態ではなく、岡部(2011)の分類であれば「内実推定」に相当するものだろう。岡部(2011)では、江戸語の推定表現を分析するにあたり、「話し手が現在把握している状況の内実を推定するもの」を内実推定、「話し手が現在把握している状況をもたらした過去の出来事を推定するもの」を原因推定と呼んで区別している(同:196)。この区別を援用すると、ヨウニ見エルは見たままの外見的印象をそのまま述べるものから、内実推定までを表わしていると言える。これは、ヨウダの性質と一致するものだろう。

ここに挙げた例は「～ようだ」のみでも捕捉印象や内実推定を表すが、「見える」が付くことで、その事態が視覚的に捉えられていることがより明確に表されていると考えられる。

3.7.2 推定2 (ト見エル)

「ト見エル」は多くの用例が「節ト見エ (テ)、節」という構造形式で現れ、後節には前節の判断(推論)の根拠となった事実が述べられる。「見える」が文末に来るものもあるが、ここでは代表形式として中止形の構造形式をあげておく。

	形式：	[述語	-	^{判断内容} 節	-	ト	^{判断実現} 見え(て)、	^{根拠} 事実叙述節]
	意味：	ある具体的事例を根拠にして推論される判断を述べる								

ここでも、他者の外見から内面を推論するタイプ(節の意味特徴が《生理・心理的状态》が見られるが、単に外面の印象を表わす(47)のようなタイプは見られない。

- (52) おっちゃんはその感覚がつかめないとみえ、黙っている。(山野博史『発掘司馬遼太郎』)
- (53) ……息子さんもタバコを吸っていたそうですが、お父さんの手術痕を見せられて改心したと見えて、少なくとも家では吸わなくなったそうです。(久保田芳郎『サラリーマンの病気学』)

反復される事実ないし複数の事例を一般化して述べるものもある。

- (54) しかるに朝鮮においては「姓」の変更は少なかったとみえ、古今を通じて同様なる「姓」が大部分の人々の間に守られしたがってまた「姓」の種類もはなはだ少ない。(戸田貞三『家族構成』)

節の内部を見ると、「ヨウニ見エル」では補節に《状態性》の述語(シテイル形)がくることが多いが、「ト見エル」では、「シタト見エル」の形が多く、このときはある具体的事例やデータから導き出される過去の未確認事態の推論を表わす。岡部(2011)の「原因推定」に相当する推定のタイプだと思われる。この領域は、モダリティ形式のラシイの推定と重なっていると考えられる。

- (55) この北海道行きは特に手当がよかったとみえ、二度も往復している。(最相葉月『青いバラ』)

- (56) よくみれば顔の形が崩れていた。屈強な水夫といえども、怪物並の城代が相手では、まるで歯が立たなかったとみえる。(佐藤賢一『双頭の鷲』)

4.8 仮想構文 (Virtual Judgement Construction)

仮想構文は補節に不定・疑問の助詞カを持つタイプで、認識主体の当該判断に対する不確かさが強く表される。また、「見える」が過去形（「見えた」）であると、当該判断が反事実であることが特に含意される。

形式：〔(人N-ニ／ガ(ハ)^{認識主体}大主語) 節-カ(ノヨウ)^{仮想内容}ニ補節 見える^{判断実現}〕

意味：視覚経験で捉えた状況を根拠に推論された、認識主体の仮想的判断を表わす。本当のところは不確かで、別物（反事実）かもしれないが、見た目から推論するとそのように判断される。

- (57) 法案は全会一致で通るかに見えた。
- (58) 正月明けに大雪が降ったことを除けば、穏やかな天気がつづき、平穏な一年がはじまるかにみえた。ところが、ひと夜明ければ二月、という今日になって、突然災いが降りかかった。(諸田玲子『お鳥見女房』)
- (59) 改造は成功したかのように見えた。だが、弦を張ったとたん、その張力で弦の元にある枕（ブリッジ）が飛んでしまった。(高田渡『バーボン・ストリート・ブルース』)
- (60) 「人間尊重」のスローガンのもとに、「ひとりひとりの子どもの能力・適性に応じた教育」を展開すると、あたかも子どもの個性を尊重するかにみえて、その実は、選別にもとづいて、国家の近代化の一翼を、それぞれ担わされる人材を養成するにすぎない状況にある。(小川 正『「魂なき教育」への挑戦』)

仮想構文はほとんどの場合、補節の命題を観察時においては真であると信じていたが反事実であったことが含意される。この反事実の含意は、助詞カの不定性に加え、仮想構文が逆接の連文構造の中で用いられ続けることにより、構文そのものが含意として取り込んだものと考えられる。この逆接の連文構造で用いられるという特徴は仮想構文に特に顕著だが、(35)(42)(50)のように、「見える」の構文全般に見られる特徴でもある。

仮想構文には、次のような連体修飾位置に現れるものもある。

- (61) 郵貯があまりに肥大した今、いったん銀行を国有化して体力をつけたあと、郵貯も含め民営化するという一見時代に逆行するかにみえる大胆な方法さえ考えるべき段階なのだ。(櫻井よしこ『迷走日本の原点』)

次のように、「～かに見える。」という「見える」がスル形である例は、比喩的判断構文と推定構文である「～ように見える」の中間例のように見える。

- (62) と伸びきった両脚をきちんとそろえ、背筋をすくっと伸ばして座っているところなど、ちょっと近づきたい気品があった。そばに腰を下ろしている娘の真弓のほうが、貫禄負けしているかに見える。(和久峻三『あやかし法廷』)

3.9 構文間の連続性

以上、「見える」が構成する構文タイプを、意味・構造的に単純な視覚認識から非常に複雑な推定構文・仮想構文へ、典型的な構造形式を記述し、その連続性を考察した。以下、構文間の関係を、特に推定構文への連続という観点から簡単にまとめる。

知的認識構文は「抽象Nが見える」という節を取らない構造形式であるが、対象となる抽象名詞が《見えにくい事柄》という特徴を持つことが分かった。こうした特徴は、すでに確認している事態から未確認の事態（見えにくい事柄）を推論するという推定の意味の萌芽と考えられることを述べた。そして、この《見えにくい事柄》を表す名詞タイプとして、《部分に対する全体》や《物事の内部にある本質・本性》、《他人の内面（心理、性質）》などがあつた。こうした意味特徴は、「NがAdjク／ニ見える」という様子確認構文、「NがNに見える」という判断の構造を持つ判断構文や、節を持つ推定構文が捉える事態と連続している。例えば、判断構文では、複数の具体的事例を概念名詞で一般化するという判断の仕方があつたが、これは《部分に対する全体》や、《物事の内部にある本質・本性》を述べる知的認識構文に通ずるものである。また、《他人の内面》を捉える知的認識構文は、様子確認構文と推定構文の推定1「～ように見える」にも共通していた。

- (63) 太郎の誠実さが見えてくる。【知的認識構文】

- (64) 太郎は誠実に見える。【様子確認構文】

様子確認構文は、対象が具体名詞ないし現象名詞であり、視覚で捉えた様子を表している点で視覚認識構文と連続している。特に《形状・色彩》を表す形容詞で構成されるときに視覚で捉えるという意味が明確である。この様子確認構文が《評価・感情》を表す形容詞や動詞テ形で構成されるときには、他人の内面を推察する意味になり、推定構文の推定1「～ように見える」に非常に近くなる。ただし、「ヨウニ見エル」の方が、完全な複文構造を取っていることから、単に見え方の描写ではなく認識者の判断が含まれると考えられる。

- (65) 太郎は憔悴して見える。【様子確認構文】

(66) 太郎は憔悴しているように見える。【推定構文】

こうした様子確認構文が形容詞や動詞のテ形といった《状態性》の句と共に起するという特徴は、推定構文の推定1「～ように見える」のヨウニ節が、典型的に「～しているように見える」といった《状態性》の節であることと連続している。

上で判断構文と知的認識構文とのつながりを述べたが、判断構文は典型的には対象が《抽象物》である。この対象が《具体物》であるとき、様子確認構文に近づく。様子確認構文は典型的に形容詞を補語とし、判断構文は名詞を補語とする。一方で、名詞が様子を表わす場合に、判断構文との形式的な区別ができない場合がある。判断構文は、本当のところは不確かだが、見た目(外見)からはそのように判断されるということを述べる構文である。一方で、「AがBニ見エル」という時、AがBではないことを認識主体が承知している場合には、「見た目からの判断」ではなく「様子」を表わしているというべきだろう。次の例は、様子確認構文である。

(67) 花子は(本当は三児の母だが)三児の母に見えない。

こうした様子確認構文に現れる名詞は、その実体面ではなく、「三児の母風」といった一般的なイメージとしての《属性》面が問題になっており、形容詞に準ずる働きをしていると考えられる。

さらに、判断構文の判断内容が《出来事》を表す動作性名詞等であるときには、ある事態から別の事態を推論していると読み取れることから、推定構文に近づくことを述べた。

(68) 向こうで何かわめき合っている。商人たちの小競り合いに見えた。【判断構文】(69) 向こうで何かわめき合っている。商人たちが小競り合いをしているように見えた。【推定構文】

仮想構文は、「～かに見えた」という構造形式で反事実的な仮想を表すが、この反事実という意味は、比喩的判断と連続している。また、「～かに見える」という形式であると、推定構文の「～ように見える」と意味的に近くなることを述べた。

4. まとめと今後の課題

視覚認識と推定の間には、外面の印象をそのまま捉えるものから、外面の印象をもとに推察を加えたり、確認した事例から一般化を導いたり、別の事態を推論したりと、段階があることが明らかになった。本研究は、こうした構文の語や節の意味特徴を取り出すことにより、構文

の典型（中心）と周辺を捉え、他の構文とのつながりを整理できることを示した。また、「見える」が構成する推定構文は、認識主体がほぼ常に話し手である点でモダリティ形式として文法化していると考えられる。本研究の記述は、三宅（2006）の言う、共時態における文法化のケーススタディであるとも言えるだろう。

動詞が構成する様々な構文を取り出して記述することは、動詞の多義を捉える上でも重要な方法論であると考えられる。認知言語学で行われているように、メタファーやメトニミーによって多義を捉える方法論だけでは、意味の立て方が恣意的になることが避けられない。多義の体系を捉えるには、それぞれの意味の典型とそれを支える構造的特徴（条件）を記述し、その構造的特徴にどのような変更がある場合に意味が曖昧になるのか、という構造的条件を指定する必要がある。本稿は「見える」という動詞そのものの多義を記述したものではないが、今後、動詞の多義を記述する上でも、構文とその連続性を見ることが有効になると考えている（茶谷（近刊）も参照）。

最後に、本稿ではそれぞれのタイプ間の関係や連続性をできるだけ意識して記述したつもりであるが、タイプ間の相互関係（ネットワーク）の詳細については、稿を改めて論じたいと思う。

用例抽出資料

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ、データバージョン1.1、中納言2.2.2.2）

参考文献

- 岡部嘉幸（2011）「江戸語の推定表現」青木博史（編）『日本語文法の歴史と変化』195-213. くろしお出版.
- 奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8（奥田（1985）3-20. に再録）.
- 奥田靖雄（1968-72）「を格の名詞と動詞のくみあわせ」『教育国語』12, 13, 15, 20, 21, 23, 25, 26, 28（言語学研究会（編）（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』21-149. むぎ書房に再録）.
- 奥田靖雄（1976）「言語の単位としての連語」『教育国語』45（奥田（1985）67-84. に再録）.
- 奥田靖雄（1985）『ことばの研究・序説』むぎ書房.
- 工藤 浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法を求めて—」『国立国語研究所 研究報告集』3：45-92.
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房.
- 志波彩子（2013）「「ト見ラレル」の推定性をめぐる—ラシイ、ヨウダ、(シ)ソウダ、ダロウとの比較も含め—」『日本語文法』13-2：122-138.
- 志波彩子（2022）「日本語の他動性構文論の記述を目指して—奥田靖雄構文理論の継承と発展—」『人文学研究論集』5：127-147.
- 竹沢幸一（2015）「「見える」認識タイプの統語構造とテ形述語の統語と意味」、由本陽子・小野尚之（編）『語彙意味論の新たな可能性を探って』243-273. 開拓社.
- 田中聡子（1996）「動詞『みる』の多義構造」『言語研究』110：120-142.
- 茶谷恭代（近刊）「動詞「つかむ」の多義の記述—連語の構造的なタイプをてがかりに—」『東アジア国際言語研究 特別号』.

- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(編) 『日本語の文法 3 モダリティ』 81-159. 岩波書店.
- 早津恵美子 (2015) 「カテゴリーカルな意味(上)―その性質と語彙指導・文法指導―」 『東京外国語大学論集』 91: 1-33.
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』 笠間書院.
- 森山卓郎 (1995) 「推量・比喻比況・例示―「よう／みたい」の多義性をめぐって―」 『日本語の研究―宮地裕・敦子先生古希記念論集―』 493-526. 明治書院.
- 三宅知宏 (1995) 「「推量」について」 『国語学』 183: 86-76.
- 三宅知宏 (2006) 「現代日本語における文法化―内容語と機能語の連続性をめぐって―」 『日本語の研究』 1-3: 61-76.
- 山岡政紀 (2003) 「可能動詞の語彙と文法的特徴」 創価大学 『日本語日本文学』 13: A1-A36.
- Gisborne, Nikolas. 2010. *The Event Structure of Perception Verbs*. Oxford: Oxford University Press.
- Sapir, Edward. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt Brace and Company. (安藤貞雄訳 1998 『言語―ことばの研究序説―』 岩波書店)

キーワード：知覚動詞、視覚、証拠性判断、様子、文法化

AbstractExtension of the Japanese Perception Verb *Mieru* to the Evidential Construction

SHIBA, Ayako

The Japanese perception verb *mieru* is an intransitive verb with spontaneous and potential meanings. The constructions that this verb constitutes range from visual perception, which is the simplest in meaning and form, to the highly complex evidential construction. Additional construction types lie between these two extremes, one of which express a certain situation on the basis of the appearance of a theme (object), and the other of which generalizes several examples observed by the perceiver. All of these are related to constructions with transitive verbs, while some of them have been extended as specific constructions of *mieru* due to the interaction between the lexical meaning of the verb and the meaning of the construction. Furthermore, this study shows that by focusing on the meaning features of the nouns, verbs, and clauses that make up the construction, it is possible to identify the typicality and periphery of the constructions and to capture the continuity between constructions (the network of constructions).

Keywords: evidential judgement, appearance, visual perception, continuity, grammaticalization